

栄養教育実習における事前・事後指導の在り方 ～社会人基礎力からみた指導効果と課題～

清水 陽子

A study of Pre-post Guidance in The Nutrition Education Training - The Instruction Effect and The Problem from Fundamental Competencies for Working Persons -

Yoko SHIMIZU

1. 緒言

社会人基礎力とは、経済産業省が定めた「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」のことで、3つの能力、12の能力要素からなる¹⁾。こうした力は、従来は課外活動やアルバイト、通常の授業の中で育まれてきたが、核家族化や地域社会の崩壊といった社会状況の変化の中で、学生たちが自然に身に付けることは難しくなってきた。

一方、学校現場では、社会のグローバル化や情報化の急速な進展により、子供たちを取り巻く状況や生活環境は急激に変化し、子供たちの心身の健康にも大きな影響を与えている²⁾。特に、生活習慣の乱れ、家庭の貧困、アレルギー疾患等の様々な疾病への対応、偏った栄養摂取など食生活の乱れ、肥満・痩身傾向など、多くの課題が顕在化している³⁾。このような複雑化・困難化した課題に向き合うため、チームとしての学校の力を向上させることが重要である。なかでも栄養教諭は、教育に関する資質と栄養に関する専門性を生かして、教職員はもとより、関係機関・専門家、家庭・地域との密接な連携を図りつつ、子供たちの健康の保持増進に向け健全な食生活の実現に取り組んでいくことが期待され³⁾、社会人基礎力にあげられている力を身に付けることが必要であると考えられる。

そこで本研究では、栄養教育実習事前指導および栄養教育実習が学生の社会人基礎力の育成にどのように関連しているかを明らかにし、よりよい栄養教育実習とその事前指導を行える改善策を見出し、効果的な栄養教諭の養成教育に役立てることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象

平成28年度に函館短期大学食物栄養学科に入學した学生のうち、2年生前期の「栄養教育実習事前指導」（以下：事前指導とする）と2年生後期の「教職実践演習（栄養教諭）」を履修した学生14名（男性1名、女性13名）とした。

(2) 調査方法

調査は、自記式質問紙を用いて3回実施した。1回目は前期の事前指導の初回講義時、2回目は事前指導の最終講義時、3回目は栄養教育実習（以下：教育実習）が終了した後期の教職実践演習（栄養教諭）の初回講義時に実施した。調査票はいずれも全て回収した（有効回答数14、回答率100%）。質問紙調査を実施するにあたり、学生に口頭で調査の目的およびデータは本研究目的以外に用いないことを説明し、同意を得られた者に対し、質問紙への回答を依頼し回収を行った。

(3) 調査内容

調査項目は、栄養教育実習における現在の心境（3回目の調査では実習中の心境）、社会人基礎力の自己評価から構成した。

①不安感と楽しみ感

教育実習に入る前の心境について不安感および楽しみ感の程度とその要因とした。不安感、楽しみ感については0から100までの数値で記述してもらい、その要因については、選択肢での回答とした。また、1回目の調査時には、不安感を和らげるためには、「自分自身どのように改善していく必要があると考えるか」、2回目の調査時には、「事前指導の中で、どのような学習内容が不

安を和らげたか（あるいは、より不安になったなど）」を質問した。なお、3 回目の調査時には、不安感と楽しみ感の実習中の心境とした。また、実習中の充実感の程度とその要因を追加した。なお、既報⁵⁾の調査結果から改善点を事前指導に反映させた。

②社会人基礎力

社会人基礎力については、経済産業省の社会人基礎力3つの能力と12の能力要素（主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）を用いた。自己評価は能力要素ごとに1～5点で評価させた。また、実習前の評価では、社会人基礎力の中から特に向上させたい能力要素を3つ選択させた。実習後の評価では、実習を通じ、特に伸びたと思う能力要素を3つ選択させた。いずれの調査時にも社会人基礎力を自己評価した感想を簡潔に記述してもらった。

(4) 統計処理

社会人基礎力の評価は1～5点で得点化し、平均値±標準偏差で示した。事前指導前後および教育実習前後における社会人基礎力の評価得点の検定には、対応のあるt検定を用いた。統計解析には、表計算ソフトExcelを用い、有効水準は5%とした。

3. 結果および考察

(1) 事前指導前後の不安感および楽しみ感の程度 (表1, 表2)

不安感の程度について、1回目では、「不安感70」および「不安感100」と回答した者が各々3名(21.4%)、「不安感80」、「不安感60」と回答した者が各々2名(14.3%)であり、「不安感50」以上と回答した学生は8割であった。15回目では「不安感50」、「不安感100」と回答した者が各々3名(21.4%)と最も多く、次いで「不安感80」、「不安感40」と回答した者が各々2名(14.3%)であった。楽しみ感の程度については、1回目では、「楽しみ感50」と回答した者が4名(28.6%)と最も多かった。15回目では、「楽しみ感80」と回答した者が6名(42.9%)と最も多かった。

表1 事前指導前後の不安感 人数 (%)

不安感	事前指導			
	1回目		15回目	
	N	%	N	%
10	0	(0.0)	1	(7.1)
20	1	(7.1)	0	(0.0)
30	0	(0.0)	1	(7.1)
40	1	(7.1)	2	(14.3)
50	1	(7.1)	3	(21.4)
60	2	(14.3)	1	(7.1)
70	3	(21.4)	0	(0.0)
80	2	(14.3)	2	(14.3)
90	1	(7.1)	1	(7.1)
100	3	(21.4)	3	(21.4)

不安感については、0から100までの数値で記述させた。数値が大きいほど不安感が大きいことを示す。

表2 事前指導前後の楽しみ感 人数 (%)

楽しみ感	事前指導			
	1回目		15回目	
	N	%	N	%
10	1	(7.1)	0	(0.0)
20	0	(0.0)	0	(0.0)
30	2	(14.3)	0	(0.0)
40	2	(14.3)	3	(21.4)
50	4	(28.6)	2	(14.3)
60	2	(14.3)	1	(7.1)
70	1	(7.1)	1	(7.1)
80	2	(14.3)	6	(42.9)
90	0	(0.0)	0	(0.0)
100	0	(0.0)	1	(7.1)

楽しみ感については、0から100までの数値で記述させた。数値が大きいほど楽しみ感が大きいことを示す。

表3-1, 表3-2に不安感および楽しみ感の要因を示した。不安の要因としては、1回目は授業のこと(85.7%)、先生方との関り(71.4%)が多かった。15回目では、授業のこと(78.6%)が1回目と同様に多かったが、先生方との関り(42.9%)は3割程度少なくなった。結果には示していな

表 3-1 不安感の要因

不安の要因	事前指導				人数 (%)
	1回目		15回目		
	N	%	N	%	
授業のこと	12	(85.7)	11	(78.6)	
先生方との関わり	10	(71.4)	6	(42.9)	
児童生徒との関わり	6	(42.9)	4	(28.6)	
2週間続けられるか	3	(21.4)	4	(28.6)	
自分自身のこと	2	(14.3)	4	(28.6)	
その他	2	(14.3)	1	(7.1)	

表 3-2 楽しさの要因

楽しみの要因	事前指導				人数 (%)
	1回目		15回目		
	N	%	N	%	
授業のこと	2	(14.3)	6	(42.9)	
先生方との関わり	3	(21.4)	5	(35.7)	
児童生徒との関わり	12	(85.7)	13	(92.9)	
給食	4	(28.6)	5	(35.7)	
その他	0	(0.0)	1	(7.1)	

いが、事前指導の学習内容で不安を和らげた要因には、「授業で模擬授業を行い覚悟ができた」、「指導案を一人で作成し初めてではなくなった」、「実習の事前訪問で先生方と会って落ち着いた」などがあげられた。楽しさの内容としては、1回目では、児童生徒との関わり(85.7%)が多かったが、授業のこと(14.3%)、先生方との関わり(21.4%)は低かった。15回目では、授業のこと(42.9%)、先生方との関わり(35.7%)、児童生徒との関わり(92.9%)などいずれも楽しみの要因が高まった。既報⁵⁾で教育実習に入る前の心境(不安感・楽しさ)とその要因を調査したところ、不安の要因としては本調査結果と同様に授業づくりのこと、人間関係を要因にあげた者が多かった。これらの結果を受け、事前指導の一部である近隣の小中学校での観察実習の際に、先生方と子供たちとの関わり方について観察の視点を明確にさせ、自らの目標を持って臨ませた。また、事前指導の時間内および時間外に指導案や教材研究などについ

て個別指導を繰り返し行った。このような取り組みが学生の教育実習に対する不安感を和らげ、楽しさ感を高めたのではないかと考える。しかしながら、事前指導の中で不安が高まった要因として「事後の報告書が多くて心配になった」などの意見も数名見受けられたことから、新たに事前指導の中に反映させ改善していく必要がある。

(2) 事前指導前後の社会人基礎力の評価得点

表 4 に事前指導前後の社会人基礎力評価得点の結果を示した。

表 4 事前指導前後の社会人基礎力評価得点

社会人基礎力	事前指導		p値
	1回目	15回目	
①主体性	3.3±0.8	3.5±0.9	
②働きかけ力	3.0±0.8	3.1±0.7	
③実行力	3.0±0.8	3.1±0.7	
④課題発見力	3.3±0.6	3.1±0.5	
⑤計画力	3.1±0.8	3.3±0.6	
⑥創造力	2.7±1.0	3.1±1.0	*
⑦発信力	2.4±0.8	2.5±0.8	
⑧傾聴力	3.5±0.9	3.5±0.7	
⑨柔軟性	3.5±0.7	3.4±0.7	
⑩状況把握力	3.5±0.7	3.4±0.8	
⑪規律性	4.1±0.5	3.9±0.6	
⑫ストレスコントロール力	3.0±1.2	3.2±1.3	
平均値±SD	対応のあるt検定		*; p<0.05, 無印; 有意差なし (ns)

事前指導前後の社会人基礎力評価得点は「創造力」で有意な差が見られたが(p<0.05)、その他は差が見られなかった。特に向上させたい能力要素(表 5)を事前指導前に3つ選択させたところ、半数の者があげた能力要素は、「発信力(78.6%)」、「計画力(57.1%)」であった。

表 5 事前指導前後の特に向上させたい能力要素

特に伸ばしたい能力要素	事前指導				人数 (%)
	1回目		15回目		
	N	%	N	%	
①主体性	2	(14.3)	2	(14.3)	
②働きかけ力	1	(7.1)	2	(14.3)	
③実行力	5	(35.7)	3	(21.4)	
④課題発見力	3	(21.4)	4	(28.6)	
⑤計画力	8	(57.1)	3	(21.4)	
⑥創造力	4	(28.6)	6	(42.9)	
⑦発信力	11	(78.6)	10	(71.4)	
⑧傾聴力	2	(14.3)	2	(14.3)	
⑨柔軟性	1	(7.1)	3	(21.4)	
⑩状況把握力	1	(7.1)	0	(0.0)	
⑪規律性	0	(0.0)	1	(7.1)	
⑫ストレスコントロール力	1	(7.1)	3	(21.4)	

事前指導後では、1回目と同様に「発信力(71.4%)」を選択した者が多く、次に「創造力(42.9%)」であった。事前指導により「創造力」は向上したと認識された反面、特に向上させたい能力要素でも学生の半数近くが選択した。事前指導では、学生同士ペアで指導案を作成し、それをもとに模擬授業を実施している。学生は、指導案作成から授業を行うまで自分たちで一から創り上げたという満足感により「創造力」は高まったと評価したものと考えられた。しかしながら、お互いに授業参観することで授業構成の比較や、授業後の教員による批評から力不足を感じとり、より高めたい能力要素の一つとして高値を示したと推察された。「発信力」については、事前指導後の社会人基礎力評価得点のなかで最も低かった。自分たちで考えた授業内容が参観者に思うように伝わらなかったため、社会人基礎力評価得点としては低く、高めたい能力要素では高値を示したと推察された。このことは事前指導後の教育実習への不安感の要因として「授業のこと」が高かった理由とも考えられた。また、多くの能力要素において事前指導による向上が見られなかった要因としては、模擬授業実施後に学生間によるディスカッションの時間が十分に確保できなかったこと、指導案や授業展開など修正する必要があるところは教員の指導を中心に改善させたため、学生の発信力や主体性の向上にはつながらなかったと考えられた。今後、授業者の意図や悩みを発表した後に授業を展開し、授業参観の視点を絞ることや授業後に意見交流する場を設けること、意見交流後に授業者間で改善点などを話し合う場が必要と考える。社会人基礎力を自己評価した感想からは、事前指導前では「積極性が欠けていると思った」など自分の社会人基礎力に対する自覚や認識が多かった。しかしながら、事前指導後では「自分から周りの人に伝える力を伸ばしたい」、「話すときに言葉がすぐに出てこないので意見をうまく伝えられない。語彙力をつける」などといった「伸ばしたい力とそのため何をするべきか」の意思表示が多くなったことが読み取れた。よって社会人基礎力を自己評価させることは、学生の意識向上を促し、教員も学生の考えを把握するのに有効なのではないかと考えられた。

(3) 教育実習の充実感と社会人基礎力からみた

教育実習の影響

教育実習の充実感(表6)では、「充実感90」が最も多く、充実感が高い傾向であった。

表6 教育実習中の充実感 人数 (%)

充実感	N	%
20	1	(7.1)
70	1	(7.1)
80	1	(7.1)
90	7	(50.0)
100	4	(28.6)

充実感については、0から100までの数値で記述させた。数値が大きいほど充実感が大きいことを示す。

学生のコメントからは、「児童生徒とコミュニケーションをとれた」、「授業をやりきった」、「先生方からの応援、支え」の記述が多かったことから人間関係の要因が大きいと読み取れた。

教育実習前後の社会人基礎力評価得点(表7)において、「発信力」(p<0.01)、「傾聴力」(p<0.01)で有意な差が見られた。また、「規律性」、「課題発見力」を除き、全ての能力要素が向上していた。

表7 教育実習前後の社会人基礎力評価得点

社会人基礎力	事前指導後	教育実習後	p値
①主体性	3.5±0.9	3.9±0.6	
②働きかけ力	3.1±0.7	3.4±0.9	
③実行力	3.1±0.7	3.7±0.8	
④課題発見力	3.1±0.5	3.3±0.6	
⑤計画力	3.3±0.6	3.4±0.7	
⑥創造力	3.1±1.0	3.4±0.7	
⑦発信力	2.5±0.8	3.4±0.7	**
⑧傾聴力	3.5±0.7	4.1±0.7	**
⑨柔軟性	3.4±0.7	3.8±0.8	
⑩状況把握力	3.4±0.8	3.8±0.8	
⑪規律性	3.9±0.6	3.9±0.8	
⑫ストレスコントロール力	3.2±1.3	3.3±1.0	

平均値±SD 対応のあるt検定 **; p<0.01, 無印; 有意差なし (ns)

これは児童生徒へ食生活全般の改善に寄与するために様々な方法で授業を実施したことや、コミュニケーションをとったことで社会人基礎力の向上につながったと考えられる。特に「発信力」は、事前指導の評価得点ではやや低い傾向であったが、伸ばしたい能力要素を常に意識して授業に取り組むよう指導したことで実習終了後の評価では有意な向上につながったと考える。一方、「課

「課題発見力」については、特に伸ばしたい力と挙げていたものは実習前では3割と比較的高い傾向を示していたが、教育実習により伸ばした力として挙げたものはみられなかった(表8)。

表8 教育実習により特に向上した能力要素 人数 (%)

特に伸ばした能力要素	N	%
①主体性	7	(50.0)
②働きかけ力	1	(7.1)
③実行力	3	(21.4)
④課題発見力	0	(0.0)
⑤計画力	5	(35.7)
⑥創造力	2	(14.3)
⑦発信力	6	(42.9)
⑧傾聴力	6	(42.9)
⑨柔軟性	3	(21.4)
⑩状況把握力	4	(28.6)
⑪規律性	3	(21.4)
⑫ストレスコントロール力	2	(14.3)

栄養教育実習の実習内容について、上田ら⁶⁾は、教科授業への参画、給食時間の指導は実習期間中扱われている学校が多いが、学校食育イベントの参加や児童への個別指導・見学は経験する機会は低率であると報告している。また、現場での実習期間は小学校や他の教諭が3～4週間であるのに対し、栄養教諭の免許状取得に必要な文科省が定める1単位分は1週間である。この期間に栄養教諭として職務内容を修得し、これまでの知識と技能を統合させ、社会人基礎力の向上を図ることは容易ではないと考えられる。しかしながら、栄養教諭は、学校における食育推進の要として、校内の教職員はもとより、家庭や地域との連携を図る役割を果たしていくことが期待されており、各々の立場に対応した能力の向上が重要となる。そのため、今後、事後指導において学生が取り組む課題として、実社会と関連のある課題を与えることや、他人に働きかけて協力を得なければならないようなプログラムを設定するなど問題解決型学習を授業に取り入れ、問題点を自ら発見し解決策を整理する力を身につけていく必要がある。また、教育実習中に多くの学生が体験する研究授業を教材とし、PDCAサイクルに基づいた食育の成果と課題を把握させ、改善を図りながら「課題発見力」、「働きかけ力」の向上に努めていきたい。

事前指導前後や教育実習終了後に向上させたい社会人基礎力を選択させることは、学生が身に付けたい能力や身に付いたと感じる能力を把握することができ、今後の栄養教諭養成のための指標ともなった。社会人基礎力の自己評価後のコメントも回数を増すごとにより具体的な評価となったことから、学生に自分の行動を何度も振り返らせることで、次の課題も見えやすくなり、力をより向上させることができたと考える。課題としては、自己評価が主観的評価のみであったため、他者評価を加えることや、具体的な行動を記入したうえで自己評価することでより学生にとって明確な指標になり、不安の解消を促す要因になると考える。質の高い栄養教諭を育成するために、社会人基礎力の向上につながる授業を目指すとともに実習前の不安を除き、よりよい事前事後指導となるよう改善していきたい。

4. 謝辞

本調査にご協力いただきました学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

5. 引用文献

- 1) 経済産業省. 社会人基礎力. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (2018/12/27)
- 2) 文部科学省. 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(中央教育審議会 第一次答申). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309615.htm (2018/12/27)
- 3) 赤松利恵: 学童期における子どもの食の課題と対策. 保健医療科学 66 (6): 574-581. 2017.
- 4) 文部科学省. 栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育～チーム学校で取り組む食育推進のPDCA～. 1-34. 平成29年3月.
- 5) 清水陽子: 栄養教育実習評価と学業成績並びに人物評価による事前指導改善策の検討. 函館短期大学 43: 33-38. 2017.
- 6) 上田秀樹, 山本早紀子, 西條千知, 辻庸子, 吉田智子: 栄養教諭制度における栄養教育実習の現状と課題. 大阪樟蔭女子大学学芸学部論集 46: 63-76. 2009.